

【B年】聖霊降臨節第13主日(2022年8月28日)

【旧約聖書日課】ミカ書 6章1～8節

- 1 聞け、主の言われることを。
立って、告発せよ、山々の前で。
峰々にお前の声を聞かせよ。
- 2 聞け、山々よ、主の告発を。
とこしえの地の基よ。
主は御自分の民を告発し
イスラエルと争われる。
- 3 「わが民よ。わたしはお前に何をしたというのか。
何をもってお前を疲れさせたのか。
わたしに答えよ。
- 4 わたしはお前をエジプトの国から導き上り
奴隷の家から贖った。
また、モーセとアロンとミリアムを
お前の前に遣わした。
- 5 わが民よ、思い起こすがよい。
モアブの王バラクが何をたくらみ
ベオルの子バラムがそれに何と答えたかを。
シティムからギルガルまでのことを思い起こし
主の恵みの御業をわきまえるがよい。」
- 6 何をもって、わたしは主の御前に出で
いと高き神にぬかずくべきか。
焼き尽くす献げ物として
当歳の子牛をもって御前に出るべきか。
- 7 主は喜ばれるだろうか
幾千の雄羊、幾万の油の流れを。
わが谷を償うために長子を
自分の罪のために胎の実をささげるべきか。
- 8 人よ、何が善であり
主が何を御前に求めておられるかは
お前に告げられている。
正義を行い、慈しみを愛し
へりくだって神と共に歩むこと、これである。

【使徒書日課】

エフェソの信徒への手紙 4章17～32節

17そこで、わたしは主によって強く勧めます。もはや、異邦人と同じように歩んではなりません。彼らは愚かな考えに従って歩み、¹⁸知性は暗くなり、彼らの中にある無知とその心のかたくなさのために、神の命から遠く離れています。¹⁹そして、無感覚になって放縱な生活をし、あらゆるふしだらな行いにつけてとどまるどころを知らません。²⁰しかし、あなたがたは、キリストをこのように学んだのではありません。²¹キリストについて聞き、

キリストに結ばれて教えられ、真理がイエスの内にあるとおりに学んだはずで、²²だから、以前のような生き方をして情欲に迷わされ、滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て、²³心の底から新たにされて、²⁴神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにならなければなりません。

²⁵だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。²⁶怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません。²⁷悪魔にすきを与えてはなりません。²⁸盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい。²⁹悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。³⁰神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。³¹無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべてを、一切の悪意と一緒に捨てなさい。³²互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい。

【福音書日課】

マルコによる福音書 10章46～52節

⁴⁶一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。⁴⁷ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めた。⁴⁸多くの人々が叫りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。⁴⁹イエスは立ち止まって、「あの男を呼んで来なさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」⁵⁰盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。⁵¹イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。⁵²そこで、イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ミカ書 6章1~8節

- 1 主が語ることをよく聞け。
立ち上がって、山々の前に告発し
峰々にあなたの声を聞かせよ。
- 2 山々よ、とこしえの地の基よ
主の告発を聞け。
主はご自分の民を告発し
イスラエルと論争される。
- 3 「わが民よ。
私はあなたに何をしたというのか。
何をもって、あなたを疲れさせたのか。
私に答えよ。
- 4 私はあなたをエジプトの地から導き上り
奴隷の家から贖ったではないか。
私はモーセとアロン、そしてミリアムを
あなたに先立って遣わしたではないか。」
- 5 わが民よ、よく思い起こせ。
モアブの王バラクが何をたくらみ
ベオルの子パラムがそれに何と答えたか。
シティムからギルガルに至るまで
主の正義の御業を考えてみよ。
- 6 何をもって主にまみえ
いと高き神にぬかずくべきか。
焼き尽くすいけにえか、一歳の子牛か。
- 7 果たして、主は幾千の雄羊
幾万のしたたる油を喜ばれるだろうか。
私は、自らの背きの罪のために長子を
自分の罪のために
胎から生まれた子を献げるべきか。
- 8 人よ、何が善であるのか。
そして、主は何をあなたに求めておられるか。
それは公正を行い、慈しみを愛し
へりくだって、あなたの神と共に歩むことである。

エフェソの信徒への手紙 4章17~32節

17ですから、私は主にあって語り、厳しく命じます。あなたがたはもはや、異邦人が空しい考えて歩んでいるように歩んではなりません。18彼らの知性は闇に閉ざされ、内なる無知とかたくな心のために、神の命とは無縁のものとなっているのです。19彼らは感覚が麻痺し、放縦に身を任せ、欲望のままにあらゆる汚れた行いにふけています。20しかし、あなたがたはそのようにキリストに〔直訳→キリストを〕学んだのではありません。21あな

たがたは、真理はイエスの内にある、とキリストについて聞き、キリストにおいて教えられたはずです。22ですから、以前のような生き方をしていた古い人、すなわち、情欲に迷わされ墮落している人を脱ぎ捨て、23心の霊において新たにされ、24真理に基づく義と清さの内に、神にかたどって造られた新しい人を着なさい。

25ですから、偽りを捨て、一人一人が隣人に真実を語りなさい。私たちは、互いに体の部分だからです。26怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません。27また、悪魔に隙〔別訳→機会〕を与えてはなりません。28盗みを働く者は、もう盗んではいけません。むしろ、労苦して自らの手で真面目に働き、必要としている人に分け与えることができるようになりなさい。29悪い〔直訳→腐った〕言葉を一切口にしてはなりません。口にすると、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるために必要な善い言葉を語りなさい。30神の聖霊を悲しませてはなりません。あなたがたは、聖霊によって、贖いの日のために証印を受けたのです。31恨み、憤り、怒り、わめき、冒涇〔別訳→悪口〕はすべて、一切の悪意と共に捨て去りなさい。32互いに親切で憐れみ深い者となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。

マルコによる福音書 10章46~52節

46一行はエリコに来た。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出られると、ティマイの子で、バルティマイという盲人が道端に座って物をいをしていた。47ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、私を憐れんでください」と叫び始めた。48多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、私を憐れんでください」と叫び続けた。49イエスは立ち止まって、「あの人を呼んで来なさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい〔直訳→勇気を出しなさい〕。立ちなさい。お呼びだ。」50盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。51イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、また見えるようになることです」と言った。52イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人はすぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・8月28日「聖霊降臨節第13主日」の日課主題は「新しい人間」。「新約」では、「(キリストと結びつく)洗礼」を通して「(キリストと共に)新しく生まれる」という理解があり、「パウロ書簡」などを中心に「新生した人」としてのキリスト者像が示されている。一方、このような信仰者像の起源を「旧約」にまで遡って辿るならば、それは、「悔い改め(立ち帰り)」として表現される。「洗礼」も、元来はこの「悔い改め」の概念と結びついて広く実践されていた信仰儀礼である。

・旧約聖書日課は、「ミカ書」から、主の告発に民が応答し預言者が助言を与えるという形式の預言箇所から。使徒書日課は、「エフェソの信徒への手紙」から、異邦人から信仰生活に入った者を念頭にキリスト者としての具体的な生き方の実践を教える倫理的勧告の箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、エリコでの盲人の癒しを伝える逸話箇所。

旧約日課(ミカ6章より)

・「ミカ書」は、「十二小預言者」の6番目に置かれている預言書で、前8世紀後半に南王国の王のもとで預言活動をした預言者ミカの預言集として編纂されている。預言者ミカは、預言者イザヤとほぼ同時代に南王国で活動した預言者で、「ミカ書」と「イザヤ書」にはほぼ同一の預言句が含まれる(ミカ4:3≒イザヤ2:4)。ただし、「イザヤ書」が冒頭で「ユダとエルサレムについてみた幻」とされているのに対して、「ミカ書」の冒頭には「サマリアとエルサレムについて幻に見たもの」とあり、北王国をも視野にした預言活動であったとされていて、両預言者の立ち位置は微妙に異なる。預言者イザヤは「アモツの子イザヤ」と呼ばれ、生粋のエルサレム神殿祭司の家系から預言者として歴代の南王国の王に助言する立場であったことが明白であるのに対して、預言者ミカは、「モレシエトの人ミカ」と呼ばれるように出自が不明確である上に、本預言書中で預言者が人々の批判に晒されていたと推認される記述もあることから(2:6以下など)、体制主流派の預言者ではなかったものと考えられる。あるいは、北王国イスラエル(サマリア)が滅亡(前721年ごろ)した同時代に北から亡命してきていた預言者ホセアや預言者アモスに近い立場の(北出身の?)預言者であったのかもしれない。なお、近代の旧約学者の多くは、「イザヤ書」に「第一イザヤ」と「第二イザヤ」の区別を見るのと同様に、「ミカ書」にも、預言者ミカに遡る預言句(おもに3章まで)と後代(バビロン捕囚期以降)の加筆(おもに4章以下)とが含まれると考えている。

・日課箇所は、「ミカ書」の第二部(後代の加筆?)に含まれるが、その中で預言者ミカに遡るものとして扱われる預言句。主なる神による告発から始まり(1~5節)、民の応答(6~7節)、預言者の助言(8節)という法廷論争に擬した形式で構成されている。

・4節には「出エジプト伝承」を踏まえて預言句が置かれ、また5節も「モーセ物語の荒野伝承」を踏まえた預言句が置かれている(5節については、民数記22章以下の「バラムとバラク」の伝承を参照)。同時代の「イザヤ書」(「第一イザヤ」)には、「モーセ物語」や「出エジプト」の伝承を想起させる預言が見られず、わずかに「ホセア書」に見られるのみである(ホセア12:14)。元来、「モーセ」に関連する諸伝承は、北王国領域の一部(シロ神殿やシケムの聖所)で伝承されてきたもので、南王国エルサレム神殿では、もっぱら「ダビデ・ソロモン伝承」が中心にあったと考えられる。預言者ミカにしる預言者イザヤにしる、この時代の預言者たちは、自身の活動拠点は南王国にありながら、北王国から亡命してきた預言者(ホセアやアモス)を通してもたらされた北領域の諸伝承(モーセ伝承、ヤコブ伝承など)を積極的に取り込む試みをしてきたと考えられるが、「ミカ書」が「モーセ伝承」を明確に取り込んでいるという点で、後代のヨシヤ王時代から展開される「大イスラエル主義」の神学形成に至る一つの系譜を見て取ることができる。

使徒書日課(エフェソ4章より)

・「エフェソの信徒への手紙」は、「パウロ書簡」の一つ。総論解説は、資料「聖書と祈りの会 220817」の使徒書日課の項も参照。

・エフェソを中心とするアジア州の教会共同体は、パウロらの活動(使徒19~20章を参照)以前から、アポロらの働きによってすでに一定の形成がされていた。おそらく、シリア州アンティオキアやローマで形成されていた教会共同体と同様に、初期の段階からひとつの拠点として形成されてきていたものと考えられる。そこで、パウロに限らず、アジア州(エフェソ)には、さまざまな立場の集団が身を寄せ、混在することになっていたと推認される。いわゆる「ヨハネの教会共同体」も、おそらく使徒ヤコブ(ゼベダイの子、ヨハネの兄)の殉教(使徒12章。遅くとも紀元44年までのこと)を契機にユダヤ・サマリアを離れ、アジア州に拠点を移して来ていたと考えられる。この「ヨハネの教会共同体」は、エルサレムに残った「主の兄弟ヤコブの教会共同体」に近い「ユダヤ伝統主義のユダヤ人キリスト教徒」の立場であったと考えられている。パウロの論敵・政敵となったユダヤ主義者キリスト教徒が、「ヨハネの教会共同体」であったと断定することはできないが、非常に近い関係にあったことは間違いないだろう。いずれにしても、アジア州の教会共同体は、シリア州アンティオキアやローマの教会共同体と比べて明らかに、ユダヤ主義的立場を取る者たちとパウロのように普遍主義的立場を取る者たちとの間での対立が激しかったと考えられる。そのような中で、パウロが両者を調停する意図があったとすれば、日課箇所のように、より律法の教えに倣ったものと言える生活倫理的勧告を示そうとしたことも、当然だったであろう。

・日課箇所は倫理的勧告には、「放縦な生活」や「ふしだらな行い」、また「盗み」を戒める教えも含まれるが、総じて相互の関係の中で発せられる言葉に関するものである。これらの勧告が、基本的に教会共同体内の信者同士の関係について教えられているものであることは、他の書簡でも見られるような 25 節「わたしたちは、互いに体の一部なのです」という表現で相互の関係性を教えていることから明らかである。教会共同体内で、立場の違いから相互に対立し、誹謗中傷したり、悪口を言い立てたりということが、実際に起こっていたことが推察される。それは、パウロが滞在することによってより顕在化したことであつたかもしれないが、そうであればなおさら、パウロは自分自身がこのような対立的関係を解消するための「赦し合い」の勧めを告げないではいられなかったであろう。

福音書日課(マルコ 10 章より)

・日課箇所は、主イエスが弟子たちと共にエルサレムに入城にして最後の一週間(受難週)を過ごされる直前に立ち寄られたエリコでの逸話を伝えている。共観福音書が共通して伝えており、広義の受難物語伝承の一部(エピローグ)を成していたと考えられる。

・「エリコ」は、ヨルダン川が死海に注ぐ河口近く、海拔マイナス 250 メートルのヨルダン峡谷にあるオアシス都市で、紀元前 8000 年紀には城壁集落を形成していた。「旧約聖書」では、荒野からヨルダン川を渡ってカナン地方に入植したイスラエルの民がヨシュアに率いられて最初に占領した都市として伝えられている(ヨシュア 6 章)。日課箇所の逸話のほか、「ルカ福音書」では、「良きサマリア人のたとえ」や「徴税人ザアカイの逸話」でこの町の名が登場する。

・共観福音書中、「マルコ」だけが、ここに登場する盲人を「ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞い」と具体的に伝えている。「ティマイ」および「バルティマイ」の名はアラム語由来の名と考えられているが、ギリシア語「ティマオー」と掛けた呼称とも考えられる。「ティマオー」の語義は「見積もる／評価する」で、「叱る／戒める」の意味で用いられる対義語「エピティマオー」と共に、「マルコ福音書」では繰り返し用いられている。ギリシア語でこの逸話を聞く者には、「ティマイ」および「バルティマイ」に「価値ある者」および「価値ある者の子」という響きを感じられたかもしれない。

・49 節には「呼ぶ(フォネー)」という語が三度繰り返される。主イエスが「呼んで来なさい」と命じられたのに応じて、人々が盲人を「呼んで」、「お呼びだ」と告げている。逸話の最初で、人々の中に盲人を「叱りつけ(エピティマオー)」て排除しようとした者が多くいたが、一方で、主イエスの言葉に素直に従って、主の言葉を盲人にそのまま伝えた者もいた、というのである。人々の用いた「安心しなさい(タルセオー)」と「立ちなさい(エゲイロー＝起きなさい)」も、主イエスの常套句である(6:50、2:9,11、3:3、5:41)。

・52 節「行きなさい(ヒュパゲクヒュパゴー)」は、主イエスが病人を癒された際に告げる常套句(1:44、2:11、5:19,34、7:29、8:33、10:21、10:52)。「マルコ」の用例の中には、「サタン」と呼ばれたペトロに対する例(8:33)、「金持ちの議員」に対する例(10:21)も含まれるが、これらの事例も、広義に主イエスの癒しの逸話と見ることもできるだろう。

来週の誕生日 (8月28日～9月3日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-206 番「七日の旅路」(I 56)は、「アメージング・グレース」(21-451 番)を作った 18 世紀英国教会の司祭ジョン・ニュートンの作詞。彼は、若いころに奴隷船船長として難船経験をして回心し、伝道献身生活に入った。曲は、米国人マーカス・ウェルズの作詞作曲した別讚美歌から曲だけ採用。この曲で、別歌詞の讚美歌が複数あり、1903 年版『讚美歌』には三つの歌詞で収録。
- ・21-470 番「やさしい目が」(=III-8、こ-114)は、新しい創作讚美歌集として 1976 年に出版された『ともこいうたおう』に採用された讚美歌で、中学英語教師の深沢秋子が作詞、作曲家で阿佐ヶ谷教会員・小山章三が作曲した。1983 年版『こどもさんびか2』、2002 年版『こどもさんびか改訂版』にも採用。
- ・21-446 番「主が手を取って起こせば」は、教団牧師・今駒泰成が「ともこいうたおう」(1976 年発行)編纂に先立つ歌詞公募に応募した歌詞。今駒が盲人キリスト教伝道協議会の働きに従事する中で着想した。今駒の歌詞は、他に 58 番「み言葉をください」など。曲は、この歌詞のために、カトリック信徒の作曲家・新垣壬敏が作曲。新垣の曲は、他に 5 番「わたしたちは神の民」や 81 番「主の食卓を囲み」など。

21-206「七日の旅路」

Safely Through Another Week

1. Safely through another week / God has brought us on our way; / let us now a blessing seek, / waiting in his courts today; / day of all the week the best, / emblem of eternal rest, / day of all the week the best, / emblem of eternal rest.
2. While we pray for pard'ning grace, / through the dear Redeemer's name, / show thy reconciling face; / take away our sin and shame; / from our worldly cares set free, / may we rest this day in thee, / from our worldly cares set free, / may we rest this day in thee.
3. Here we come thy name to praise, / let us feel thy presence near; / may thy glory meet our eyes, / while we in thy house appear: / here afford us, Lord, a taste / of our everlasting feast, / here afford us, Lord, a taste / of our everlasting feast.
4. May thy gospel's joyful sound / conquer sinners, comfort saints; / may the fruits of grace abound, / bring relief for all complaints: / thus may all our Sabbaths prove, / till we join the church above, / thus may all our Sabbaths prove, / till we join the church above.